

3. 情報共有セッション「留学生受け入れのための取り組み」

①一橋大学

- ・2015年度（5月1日）732名。
私費留学生は韓国人がトップ。大学院留学生422名で過半数。
- ・神田キャンパスは英語での教育、国立キャンパスは日本語による教育を実施。
- ・大学院生のための初級前半（週2コマ）は日本語教育専攻学生の教育実習現場として活用。
- ・各学部・研究科教育科目として専門日本語授業が実施されている。
- ・商学研究科（修士）には、特別プログラム日本語学科で週8コマ実施。専門日本語を集中的に学習。プレゼン授業では、企業分析等を含めた専門記事のプレゼン等を実施。
- ・学部、研究科ともすべて単位科目として実施。

【課題】

- ・集中コース（初級・週10コマ）は受講者が少なくなっている。ゼロ初級研究留学生在が少ない（文系大学ゆえの状況）。また、交換留学（特に半年留学）が増加している。
- 集中コースを改編し、サバイバルジャパニーズ（週3コマ）、中級ブリッジコース（週2コマ）の開設を検討中。
- ・4学期制がスタートし、1コマ105分×7週（1学期）に改編するが、非常勤講師の確保などに困難が予想される。

②東京大学

- ・PEAKプログラム（英語による教育プログラム）をSGUで開始。この中に日本語授業がある。
- ・留学生全体（2015年11月1日現在3308名）の過半数は大学院生。
- ・通常の学部留学生は外国語科目の一環として日本語を履修する者もいる。
PEAKの学生は、必修日本語科目（1年生・6単位）、選択日本語科目を履修（1-2年生）。
- （2015年4月から4学期制開始）
日本語科目は105分×週2コマ×7週=2単位
- ・学期ごとに留学生数の変動が多く、臨機応変にクラス開講数を調整し、内容も学生に合わせて変更が可能になっている。
- ・授業記録はクラウドに残して共有している。
- ・学生の学習上の課題を発見し、それを課題するために個別学習をしている。

【課題】

- ・学生の日本語力の差は大きい。初級レベルの学生が1.5年程度では日本語の授業に参加するのは困難。学習時間の確保が問題。